



## 伝統の心

元千葉県南房総市教育委員会外国語指導助手  
**Hannah Olivieri**  
ハナ・オリヴィエーリ

JETプログラムを通じて日本へ仕事をしに行った外国人たちと同じように、私は真夏の猛暑の中、新しい国へ旅立ちました。うまく慣れるかどうか、何が起こるか全然知らずに、家族の愛があふれている家にも一緒に成長してきた幼なじみの友人たちにもお別れを告げました。

あの頃から私の「ふるさと」になる街での第一歩を、私は昨日のようにはっきり覚えています。蝉や近くで遊んでいる子どもたちの声が響き、そよ風に揺れている稲穂を見かけました。松尾芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蝉の声」という夏にふさわしい俳句を考えながら、私は朝の涼しい時間に勤務先の中学校へ歩いて通ったり、生徒たちにあいさつをしたりしました。日本に来たのが念願の夢だとしたら、まるでまだまだ目が覚めていないようでした。

「いなかぐらし」というのは、田舎の温かさを実際に経験した人しか理解できないものです。私は南カリフォルニアの都会の近郊で育てられたので、隣の人との友情の感覚が分かっていると思っていましたが、富山町という千葉県の田舎の街に住むまでは、コミュニティのメンバーになることも、周りの人とお互いの面倒を見る良さも、本当の意味ではわかっていなかったことが明らかになりました。例えば風邪をひいた時に、同僚も隣の人も食料品を持ってきてくれました。それに東日本大震災の際、電気がない一晩を過ごした恐ろしい夜には、一人暮らしをしている私を自分の家に泊まらせてくれる友だちがいました。3年間こういう人たちが一緒に日々を過ごしてくれたおかげで、日本でふるさとの温かさを感じ

ることができました。

また、田舎に住んでいたおかげで、伝統的な活動に参加できました。大学で人類学を勉強した者として、実際に新しい文化が経験できて、最高にうれしかったというより本当にワクワクしていました。無機質な大学の教科書のページから、目の前で現実的な物になったようでした。毎日の冒険で数限りない発見もでき、いつまでもあの街にいられそうな感じでした。せっかくの機会だからこそ、中学校の先生たちに街の趣味の会について聞きました。私はいろいろな活動に参加したいという気持ちを抱いていましたので、すぐに踊り、三味線、箏（琴）、和食、生け花など、毎日のように習い事の予定が入りました。

伝統芸能について、いろはから習いはじめてしばらくすると、発表会へ参加しないかと誘われました。初めてサークルの仲間たちに聞かれた時、本当は少し驚きました。こういう大事なイベントに出たら、伝統芸能の代表になるのではないかと思ったからです。私は、昔の芸能に興味のある日本人の若者が減りつつあるなかで、消えてしまいそうな伝統芸能について学んだり知識を集めたりする人は、周りの伝統芸能に興味のある人たちに教える責任があると信じています。それなら、私も学校の生徒た



南房総市の祭りでの日本舞踊

ちなどに伝統芸能について教える機会もあるかと思いました。けれ

ど、外国人が日本人の前でそういう役割を果たすのは、ちょっと<sup>ずうずう</sup>図々しいかもと感じていました。しかし、心配もあるけれど、まずは習い事を楽しめるだけでいいと思い、参加を決心しました。

あっという間に季節が変わり、時が速くたちました。3年間で共通の芸能を通じてたくさんの面白い人に出会えるチャンスも得ました。間話の話を聞くことも、一緒にお稽古をすることもあり、長い付き合いで街の人たちと仲良くなるとともに、世界に対する見方が広がっていきました。今から考えると、これは大切な思い出だけでなく、こういう活動をする事で日本にいる間、毎日豊富な経験を得ました。私はすごく恵まれていると気づきました。もしかすると、これは伝統芸能のおかげかもしれません。

外国人の友達とこういう話をしていたある日、「ハナは、なんであんなに時代遅れなことが好きなのか？オタクみたいだよ」と言われました。そういう言い方はちょっと大げさすぎると思いつつも、自分らしく進もうと決めたから別に構いませんでした。その人に「何が悪いの？」と聞いたら、なんの返事も出てこなかったのです。アパートに帰っても、一晩中この話を考えてばかりいました。「わたしはそんなにおかしいのか？」と自分に尋ねました。

ある日、下北沢の音楽の祭りに行くために、日本人の友達と東京駅で会いました。ちょうど夏の祭りの頃だったから、友達は浴衣を着ていました。しばらく駅のお店を歩いていると、友達の帯が緩んで、ほどけてしまいそうになったのです。私は「直してあげようか？」と友達に聞きました。友達は信じられないという顔をして、首を傾けながら「えっ、できるの？」と聞き返しました。実は、私は踊りの稽古で毎週1、2回着物を着ていたのです。すぐ自分でできるようになっていたのです。私は「おいで」と返事し、30秒もかからず結び直すことができました。友達は、「どうしてハナちゃんは外国人なのに、あたしよりうまく結べるの？」とたずねました。普通の日本人の若者より私の方が伝統的な活動などに凝っていたのは確かにおかしいと思った時もあるけど、あの日、私は大事な教訓を学んだような気がします。日本人でもアメリカ人でも、国籍を問わずどこの国の文化を勉強した結果、文化というのは自

分の物になるということです。

そして、とうとう帰国する日がやって来ました。私は空港で涙を流しながら、大好きになった



三味線を演奏

友達にさようならを言いました。帰ってからも、日本にいた日々は私の宝物として心の中に残っています。私は、今年の選挙で南カリフォルニアのJETAA (JET同窓会) の会長になりました。そして毎月、JETプログラムに参加した方々のためにたくさんのイベントを開いています。イベントで元JET参加者と話したら、いつも私たちの大好きな日本についてストーリーを語ってくれます。それは、育ちや性格が違っていても、日本は私たちの人生の大切な一部になっているからです。

2年間たってしまったけれど、私はずっと千葉県その小さな街を愛しています。いまでも毎日毎日、富山町の人たちに会いたくてたまらないです。帰国したばかりの時には、別れて心が引き裂かれそうな日もあったけど、世界のどこにいても、温かい友情が残ります。富山の方々へ1つのメッセージがあります。それは、「みんな、ありがとう！ずっと覚えているよ。忘れはしない」ということです。

※和文・英文とも筆者が執筆しました。

カリフォルニア州オレンジ郡出身で、現在はOtafuku Foods, Inc.で翻訳やアシスタントの仕事をしています。彼女はカリフォルニア大学ロサンゼルス校において、人類学の分野で人文科学の学位を得ました。余暇にはサルサダンスやバレーボール、ボクシング、ポイダンス、



Hannah Olivieri

そして26年近く学んでいるクラシックピアノを楽しんでいます。また、2008年から2011年までの3年間、千葉県でALTとして勤務していた時には、日本舞踊や三味線、琴を学んでいました。現在、JETAA (JET同窓会) の南カリフォルニア支部の共同代表であり、地域レベルでの日本とアメリカの文化交流の発展に努めています。

# The Heart of Tradition

Hannah Olivieri

I remember very clearly the day I first set foot in what was to become my hometown while in Japan. I could hear the voices of the cicadas in the trees and the children playing nearby as I watched the rice in the fields sway gently in the afternoon breeze. Matsuo Basho's summer haiku about the cry of the cicadas came to mind as I walked to school greeted by the students in the cool of the morning. It was as if coming to Japan was like a dream I had not yet awakened from.

Life in the countryside is something that only those that have experienced it personally can truly understand. I was able to take part in many traditional activities thanks to living far outside the limits of the big cities. As someone who studied anthropology in college, the ability to experience a new culture first hand was truly an exciting prospect. It was as if everything I saw became something tangible and jumped out of the pages of my textbooks to become something real right in front of me. Soon, my schedule began to fill up with activities like Japanese dance, koto and shamisen lessons, Japanese cooking, and flower arrangement, among other things.

After a while of learning about traditional arts, I was invited to take part in a local cultural festival. Truthfully, I was a bit surprised to be asked to participate. I thought that if I were to be a part of such an important event in the town, it would make me a spokesperson or representative on behalf of traditional arts in Japan. In a world where young people don't show much interest in traditional arts, I knew that I would have a chance to teach the students something important if I developed my skills, but as a foreigner, I had a sense that it would be a bit audacious and brazen for me to undertake the role of cultural spokesperson on behalf of the arts to Japanese people. For the time being, I put my misgivings aside and decided just to enjoy myself while I learned about the rich culture around me.

Before I knew it, the seasons began to change and the years quickly passed. I was able to come in contact with so many interesting people who shared my love of the arts. I became close with them as we practiced together and my view of the outside world grew as I listened to their stories and came to know them all better. Looking back, I realized that all the wonderful memories I made while learning about arts in Japan made my experience there all the richer. I feel so lucky to have been able to become a part of the town and I realize that this was considerably due to taking part in the traditional arts of the community.

One day I met a friend at Tokyo station before she went

to a music festival. She was wearing a *yukata*, as it was just around that time of the summer when festivals are so popular. After walking around the shops in the station for a while, her obi came loose and seemed like it would fall down, so I offered to fix it for her. She looked at me skeptically and asked, "Can you actually do that?" As it happens, I had been taking dance lessons one or two times a week since I got to Japan and I wore a kimono almost every time, so I learned how to dress myself in a kimono or *yukata* fairly soon after my arrival in Japan. "Come here," I directed and fixed her obi in less than 30 seconds. She asked me, "How is it that a foreigner can do this better than I can?" There were definitely times when I thought how strange it was that I seemed to be more into traditional arts than young Japanese people usually are, but I believe I learned something really important that day. Whether you are Japanese or American, the result of studying a foreign culture is that no matter what your nationality is, culture is something that becomes your own- a true part of you.

A year has passed since I came home and I have continued to love that small town in Chiba all the while. Even now, I miss them all so very much and I think of them every day. When I first came home, I thought there were times my heart would break, but wherever I happen to be in the world, the friendship that I developed with the people of the community remains with me. I hope that wherever they are, everyone in that town will know how much I still think of them and that I will never forget the years we spent together.

英語



アメリカでも着物をたまに着ます